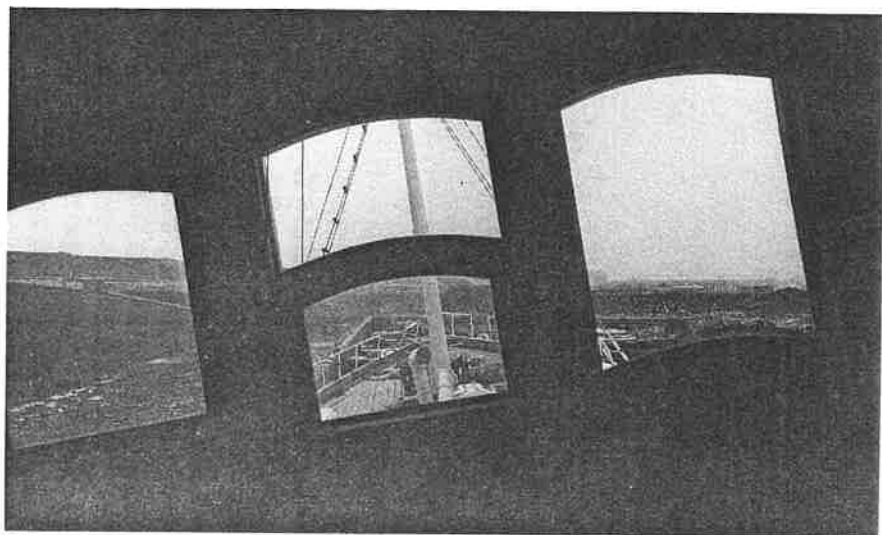


福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財)第五福竜丸平和協会
〒136 東京都江東区
夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-3521-8494



操舵室から船首を望む 撮影・後藤一弥

一九五四年、第五福竜丸がビキニ環礁で被曝した時、私は十歳でした。それから四十一年を経過した今年七月、第五福竜丸展示館を訪れ、この船が夢の島に廃棄されていた当時の写真数枚を展示館に寄贈しました。

その写真を撮影したのは一九六八年で、私が二十四歳の時でした。趣味で撮っていた写真仲間友人のご尊父が水産庁勤務だった関係で、第五福竜丸の被曝後の経過と夢の島に廃棄されていることがわかったのです。廃棄場所は当時は本場にゴミの廃棄場でしたから、公共交通機関とてなく、トラックでヒッチハイクして行きました。

目指す船はいかにも廃棄された船らしく、傾いたまま係留されていました。周囲はほとんど水没し

二十七年後の写真寄贈

後藤一弥

た船ばかりで、船の墓場の様相を呈していました。

船名が「はやぶさ丸」になっている経過は友人経由で水産庁から聞いていましたが、被曝から十四年、とうの昔に廃棄になっていたとばかり思っていましたし、そのような公的な報道は聞いたことがなく、この船が本当にあの第五福竜丸なのか、半信半疑でした。よみがえった亡霊に会ってしまったような、不気味な気分でもありました。それでも船に乗りこんで写真を撮りました。

エンジン・ルームにエンジンはなく、底に水がたまっていました。キャビンの二段ベッドには布団が敷いてありました。丸窓の枠は外されて錆びた丸い穴になっていました。無線室の無線機は荒らされ

慢性肝炎となって今も続いています。退院後は、しばらく下痢が続いていましたが、盲腸が急に大きく腫れ、手術して取りました。盲腸炎は当時アメリカが太平洋で核実験を始めた頃から、他の漁船にも異常に増えたと言う記録があります。そして一番心配していたことが起こりました。最初の子供が死産でした。一昨年の十一月には恐れていた肝臓がんが見つかり摘出手術を受けました。その後様子を見ていたのですが、ここに来てまた別な所に影があると言われてショックを受けています。

このビキニ事件は、日米政府の間でその年のうちに政治決着させられました。そして全てが済んだことにされてきています。私の身体の中も、その政治決着と同時にきれいに治ったと言うのでしょうか。とても納得できません。

病氣と同じように悩む問題がもう一つあります。被爆者という偏見と差別です。これは、隠そうとしても振り払っても離れてくれません。家庭の奥深くまで忍び込んできて、子供の結婚まで邪魔をします。そんな時、私には慰めてあげる言葉がありませんでした。家内も思い余って、被爆の話をするのはもうやめたら、などと小さ

な声で言います。やめよう、黙ってしよう、と何度も思いました。しかし納得できない仕打ちや、言いたいことも言えずに死んでいった仲間たちのことを思うと、やはり私は黙ってはいられません。

私もここに来て、自分の残された時間もう少ないような気がして、今話さなければと、せきたてられるように夢の島の展示館に出掛けています。東京都立の第五福竜丸展示館の中には、平和のシンボルとして生まれ変わった第五福竜丸がいます。かつて四〇年前、広島で第一回原水爆禁止世界大会を開かせた船です。近隣の学校や、修学旅行の生徒たちは、平和学習の場として、また、各団体なども核兵器や放射能の恐ろしさを聞き、思いを新たにしています。

東西大国の核兵器開発競争は、罪もない大量の被爆者を生み出した。被爆者たちはみな弱い立場の者ばかりです。そして今も苦しんでいます。五大国の永久核兵器保有を決めたり、未だにフランス、中国の核実験の話など続いています。核兵器は絶対に人類を幸せにはしません。これは悪魔の持ち物です。ましてや未来を担う子供たちにも手渡してはなりません。こんなものを作り出した科学者や指

導者たちは(神の名において)厳しく罰するべきです。人類を破壊に導こうとした犯罪者として、歴史の上にもはっきり印すべきだと思っております。

私もみなさんと同じ様に、核兵器廃絶のために、これからもビキニ事件を伝え続けてまいります。宜しくお祈りします。

第五福竜丸の元乗組員で亡くなられた方々

久保山・I 元無線長
肝機能障害・放射能症
一九五・〇三死亡 四〇歳

川島・M 元甲板長
肝機能障害・肝臓癌
一九五・〇四死亡 四七歳

増田・S 元甲板員
肝臓癌・肺血腫等
一九九・三・二死亡 四七歳

鈴木・S 元機関員
肝硬変・交通事故
一九八・六・八死亡 五七歳

増田・Y 元機関員
肝硬変・脳障害
一九五・二・四死亡 五〇歳

山本・S 元機関長
肝臓癌・肺病・結腸癌
一九七・三・六死亡 五九歳

鈴木・T 元甲板員
肝臓癌
一九六・四・五死亡 五九歳

高木・K 元機関員
肝機能障害・肝臓癌
一九九・二・八死亡 六六歳

ご冥福を祈ります。
(第五福竜丸乗組員・協会評議員)

高校生熱心に学習

戦後50年、広島・長崎被爆50年の八月、連日の猛暑の中、展示館は高校生の学習で熱気いっぱい。都内、近県から十五校余の高校生が四、五人のグループで次々に夏休みの課題レポート、修学旅行の事前学習の「宿題」などで来館し、「ビキニ事件の今日的意義」について学びました。

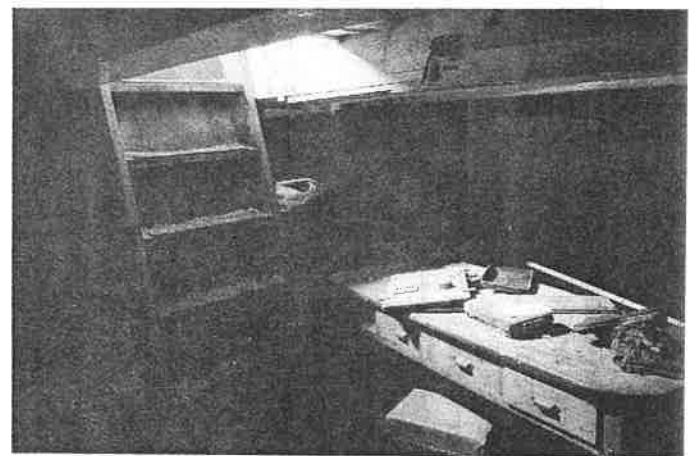
中国、フランスの核実験への関心、行動への意思表示も強く、備えつけの感想文ノートに抗議の声、反対の署名運動にとりくみたいなど書き記しました。

大石又七氏の体験を聞く会も松戸市の中高生のオリープの会、横浜市若葉台市民自治会を求めるといっくつかあり、大石さんは展示館での相つぐテレビ、新聞の取材の合い間をぬって真摯に対応。八月九日にはNHKテレビが午前七時台のニュースで展示館から生中継を行ない、八月十五日にはTBSテレビが早朝五時半から六時五〇分のニュース番組を夢の島から生中継し、「戦後50年あらためて核問題を考える」と、第五福竜丸の船上から大石さんの証言を中心に、「死の灰」の影響などについて放送しました。

ていました。操舵室からの眺望は、水平線が傾いていました。デッキに出ると、この小さな船が太平洋の荒波にもまれていた様子が想像できました。丹精こめてプリントした写真は、写真専門学校に籍を置くくだんの友人も悪くない出来だと言ってくれましたが、発表するあてもないままになっていました。



で考えていなかった自分を恥じました。この投稿が契機となって船の保存が決定し、展示館ができたことは新聞で知りました。しかし訪れる機会もないままに今日まできてしまいました。当時はなかった京葉線新木場駅から歩いて十五分ほど、整備された道路と緑に囲まれた展示館は、ここがあの「船の墓場」とは信じられない思いです。展示館脇の水路に当時の面影を探しましたが、近代的なマリナーとなった今はどこにもその面影はありません。展示館に入って下から船を見上



げると、こんなにも大きかったのかと、思いを新たにしました。下から見ると本当に大きく見えます。喫水から下のマスがいかに大きいかということでしょう。資料の展示を見ていると、当時の日本が広島・長崎とはまた別の核の恐怖に騒然としていた様子が思い出されます。日本は三たびの核の被害国だったことが実感としてわかりました。展示を見ながら、今にも沈みそうな姿で焼津に帰港してきた第五福竜丸の映像がオーバーラップします。死の灰が珊瑚の粉末だったことを改めて知りました。被曝船員の団体が二十六年後の一九八〇年になって初めて結成されたことも衝撃でした。一巡してから事務室を訪れ、持参した写真を寄贈しました。幸いにたいへん喜んでいただけ、特に内部の写真は貴重なお話に、ほっとしました。今日では外観はともかく、内部は補強のために変わってしまったというお話でした。何とかお役に立てそうで、肩の荷が下りた思いです。おりもり、フランスが核実験

を再開するとの報に世界中が抗議している時期に、ある意味ではタイムリーではありません。ここ十年ほど写真を撮る生活から遠ざかっていましたが、戦後五十年を契機に、南太平洋の島々にまだまだ残る戦争の残骸を写真に撮っています。いつの日にかまた、何かのお役に立てることを念じながら。(会社員)

第二回国際平和博物館会議に出席して

藤 田 秀 雄

今年の八月二六日から二〇日まで、ウィーンの南・ハンガリー国境に近いシライニング市で開かれた、第二回国際平和博物館会議に出席してきました。シライニングは、市といっても、人口は三〇〇〇人より少なく、鉄道の駅もないまです。あとで、オーストリア人に聞いたことによれば、人口は少なくても、何か歴史的な特別な事情があれば、市としてみとめられるということでした。

会場は、ここにある、古城を利用したオーストリア平和・紛争解決研究所でした。参加者は、五〇名ならず、ヨーロッパ・イスラエル・アメリカ・日本・各地の平和博物館の人たち、イギリス等で、平和博物館設立運動をしている人などでした。(なお、第一回は、イギリスのブラッドフォード大学で、二年前に開催。)

日本からは、立命館大平和ミュー

ジウム、丸木美術館、高知市の草の家、広島・埼玉の資料館からの人たち等で、わたしは第五福竜丸の報告をしてほしいという依頼で参加しました。日本の平和のための資料館の数は、世界で、ずば抜けて多いため、参加者数も最も多くなりました。

よびかけ人は、ブラッドフォード大・平和学部の教師ピーター・フォン・デン・ダンガン氏です。彼は昨年、この第二回国際準備のため、第五福竜丸展示館など、日本各地の平和のための展示館・博物館を訪れています。

こういう会議が開かれるようになったのは、近年ユネスコが「平和文化」を重視するようになったからです。それは、子どもたちの平和教育活動とともに、おとなの平和学習・文化活動、平和のための施設、マスメディア等の平和のための活動、各種の芸術・文化活

動を重視しようというものです。報告の多くは、各施設の目的・展示内容・活動の紹介でした。アメリカの二つの施設と一つのプロジェクトの事例が、戦争に関するものでなく、いわば日常生活における平和問題であったのが特徴的でした。スミソニアン問題もとりあげられました。設立運動や館の内容を平和目的のためにづくりかえようとしている事例の報告もありました。

わたしは、報告前に中国の核実験がおこなわれたこともあって、第五福竜丸展示館を「世界で唯一の核実験に反対する平和博物館」として、第五福竜丸事件、展示内容、来館者数等の報告をしました。また、この事件が日本の反核・平和運動を大きくすすめたことから「日本の平和運動のモニュメント」でもあると述べました。さらに、年間七〇〇以上の小・中・高校生の団体利用があり、その際、①教師による事前の訪問と学習、②児童・生徒の事前学習、③来館時の展示館側からの話、④その後の児童・生徒の学習のまとめや平和宣言づくりなどのプロセスを通して、展示館(平和博物館)の役割を考

える必要があると報告しました。さて、第三回国際会議をどこでおこなうかは決定しませんが、三年後に日本でおこなう可能性があり(日本でおこなうと参加者の経済的負担が大きすぎるという反対意見も強く出ましたが)、日本からの参加者の合意として、日本の参加者は「次期会議の開催について、何らか約束をしていく立場にはない」が、帰国後、日本開催を「追求する意志」をもち、九月中旬に予定されている日本の展示館、資料館会議や各館で、日本開催の「可能性が模索されることとなる」という意見を述べました。

「平和博物館」の定義について、まだ明らかになっていないわけではありませんが、ダンガン氏の意見では、ヨーロッパ各地のレジスタンス博物館はもとより、アンネ・フランクの家のようなものも、この中に含まないという考えのようです。中国等のいわゆる「十五年戦争」下の事実をテーマにした博物館をどう考えるかという課題もあります。第三回国際会議では、各館の報告と交流以上のものが追究されるべきでしょう。

(立正大学教授・協会評議員)

核兵器と科学者

連載 9

原爆開発の興奮と痛恨 (8)

——「投下」報道の衝撃とさまざまな反応——

小川 岩 雄

一九四五年八月六日朝八時十五分(米国では五日の午後一時一六時)、広島に一発の原爆が投下され、人口約四十万の中都市が壊滅したとのニュースはたちまち全世界に伝えられ、各地の人々、とりわけ原爆の開発を提案したり、自ら開発に携わってきた科学者たちに深刻な衝撃とさまざまな反応を引き起こした。

シラード博士らの熱心な要請に応じてルーズベルト大統領に手紙を送り、原爆の開発を急ぐよう進言したアインシュタイン博士は、ニューヨーク州サラナック湖畔の山荘で、お茶を入れてくれた女性秘書から「ラジオで言っていましたよ」と告げられ、思わず「ああひどいことを！ そうじゃないか」とつぶやいたという。

提言がこういう結果を招いたことで深刻な自責の念に駆られずにはいられなかったように思われる。実際、例えば私にとって母方の叔父に当たる故湯川秀樹が、戦後オックスフォード大学の高級科学研究所に滞在していたとき、夫婦でアインシュタイン博士にご挨拶したところ、「博士が私どもの手を取って、日本人々には本当に申し訳ないことをした、どうか許してほしい、と涙を流さんばかりに語られた」と私は叔母から何度も聞かされている。

その日、会いにきた新聞記者にアインシュタインはただ一言「ああ、世界はまだそういうこと(核エネルギーの解放)を迎える用意がないんです」とだけ語った。広島、長崎の悲劇と、昨日までの同盟国ソ連との間に憎悪と敵意をおおる冷戦の激化は、博士を情熱的な平和運動へと駆り立てた。

博士は戦後間もなく、「人類が戦争を放棄しなければならぬ時が遂に訪れた。国際問題を戦争に訴えて解決することは、もはや合理的ではなくな

った。」と述べ、一九四六年には「原子科学者非常事態委員会」の結成を呼び掛けて自らその議長に就任し、ライナス・ポーリング、レオ・シラード、ハンス・ベーターら指導的な科学者を集めて活発な国際的活動を開始した。

一方、原爆開発の「仕掛け人」とも言えるシラード博士は、爆弾が結局は投下され、反対してきた自分たちが負けると分かっていたから、爆弾が遂に落とされたと聞いても、むしろほっとした気持ちだった、と後に回想しているが、実際はかなり興奮したようだ。

彼は先ずトルード夫人に手紙を書き、「日本への原爆使用は史上最大の失策の一つだよ。ぼくは止めさせようとして暴れたが、だめだった。これからどうすればよいのだろう。」と述べている。

原爆について自由に語れるようになったと思っただけの安堵感、広島からの被害が次々と伝えられるにつれて耐え難い恐怖と

戦慄に変わる。彼は考え込み、知人に手紙を書き、長電話をかけまくる。そして先ず学長室に駆け込み、冶金研の所員は全員腕に黒い腕章を付けてはどうか、などと言いつつ、学長を当惑させたという。

一九五七年、私が最初のパグウォッシュ会議で初めて博士にお目にかかったとき、何気なしに「私は広島

の近くで原爆に出合ったんです」とお話ししたところ、博士が突然真顔になり、「爆心から何キロかね」と聞かれたことを思い出す。「十六キロです」とお答えするや否や、博士から「それなら大丈夫だ。放射線は届かんよ。」というお返事が返ってきた。博士が「原爆に出合った日本人」に会ったのはこれが最初だったのではなかなるか。私は博士の痛恨と罪悪感がどれほど深いかを、膚で感ぜずにはいられなかった。

博士もまた戦後、アインシュタイン博士らとともに平和運動に熱心に取り組み、パグウォッシュ会議にも最初から参加して、独創的な提案で討論に大いに貢献した。

(この項続く)

(立教大学名誉教授・協会理事)